

東京大学教授

藤森

FUJIMORI
Terunobu

二〇〇七年二月五日(月)
東京大学生産技術研究所
藤森研究室にて

明治の土木建造物は
美しい

——建築史家として、「建築探偵」、

「路上観察学会」においての活動も知られていますが、今までの活動のなかで印象に残っているものはありますか。

藤森——早い時期から明治の土木建造物を見歩いてきましたが、それがとても印象に残っています。なかでも、今から二十五、六年前に見た、琵琶湖に注ぐ草津川上流にある砂防ダムで、オランダ人のヨハネス・デレーケが技術指導してつくった「オランダ堰堤」は印象的でした。土木の建造物を見ていると、美的に問題が多いもの

照信

さん
に聞きました

もありましたし、本当に働いているのかわからないものもあります。ところがオランダ堰堤は、石積みのダムで、上に登ると全部砂が埋まっているのです。役に立っているんだと実感しましたし、百年以上前につくられた古い石積みと真新しい砂の堆積の対比が実に美しいのです。

また、福沢諭吉の婿養子で電力王といわれた福沢桃介が大正十一年につくった、長野県木曾の日本最大級の木橋の桃介橋が近代化遺産で復元、保存されていたのを、たまたま通りかかって見たのですが、それはうれしかったですね。最近、こうした土木遺産が重視され、着々と成果を上げているというのは喜ばしいことです。ただ一方で、残念ながら大事なものが壊されています。福島県の無線塔は大正十年につくられたも

ので、高さ約二〇〇メートルの巨大な鉄筋コンクリートの円筒になっていて、見ると山よりも高いという感じです。取り壊されてしまいました。今あれば名所になったでしょう。

「路上観察」は、まちを歩いてマシホールや郵便受けなど、人が気づかないものを見つけるといって「発見の喜び」があります。一九八六年に「路上観察学会」をつくって二〇〇年活動を続けてきましたが、今でも飽きませんね。

人は美しいものを
残そうとする

——現在、都市再開発、景観を考慮したまちづくりなどが活発に行われています。現在のまちづくりに関してご意見はありますか。
藤森——まちは歩くことが基本



聞き手



日比野直彦

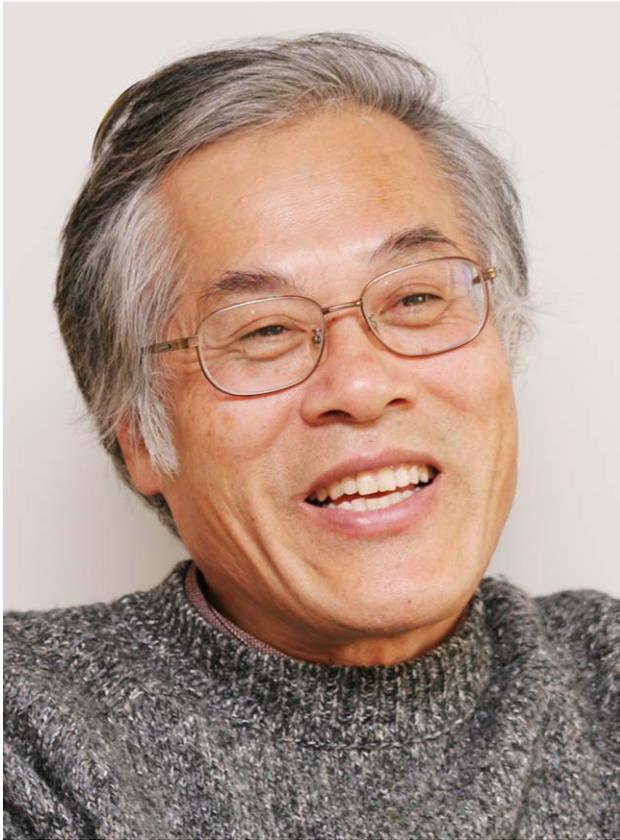
編集委員

[writer] 駒崎文男
[photo] 崔 健三

だと思いません。そこが安定して、充実していないと、まちはつまらなくなりそうです。歩く場所が確保されていくということでは、意外と東京の都心は、銀座も丸の内も人が歩いていていいですね。むしろ地方都市のほうがモータリゼーションの発達で、車で郊外のショッピングセンターへ行ってみんな買い物をするから、歩かなくなっています。まちの実体がなくなっているということ、問題は大きいと思います。

公共交通機関で行って降りて歩

く。そこにまちの楽しさがあります。ロードサイドは美しくないですね。見た目で美しくないものは、結局百年単位では残らないと思います。四十を過ぎたら自分の顔に責任をもてといいます。あれは、顔に、自分の思想や好み、肉体的な状態がすべて表われているということなのです。顔を見れば一目でわかる、そのために顔はついているのです。一般的に美しいとか、いい感じがするというのは、実はその内容を示しているのではないかと思っています。人は美しいものは残そうとします。人は自



然界の中で生きてきたわけ、自然界の中のバランスのある状態を美しいと感じるのではないのでしょうか。美の起源というものが、そこにあるのではないかと最近はずっています。バランスの崩れた状態は、危険があり、避けなければならぬ。バランスがとれていて、矛盾がなく、変化はしても循環して、ある安定がある。それを見たときに人は美しいと思う。それは人間の美意識の元になっているのではないのでしょうか。ヨーロッパのローマ時代の水道も、なぜ今まで残り使われていたかという点、実用よりは美しかったからだと思います。

「言葉」が大切 専門家と市民をつなぐ

——これからは土木とか建築と
か分ける必要はなくなってくるよ
うに思えるのですが。

藤森——つくる立場、管理する立場からいうと、土木と建築は全然違います。また、土木と建築の人はメンタリティーが違います。この研究所は土木と建築の先生が半々くらいいますが、土木の

人たちはある秩序をつくっているということ、勝手な人は少ないですね。建築の人はみんな勝手です(笑)。ただ、土木、建築というのはつくっている方にはバラバラですが、使っているほうからすると同じものなのです。土木の上を歩きながら建築のほうへ行くわけですし、建築の中のインフラは土木です。これからは、そういった使っている人たちのことを考え、彼らの目からどう見えているかを考えないといけない。それがないと結局誤解されることになります。そのとき、必要になるのが、土木であれば、土木の歴史であり、土木の物語であり、土木の専門的な知識を普通の人にはわかりやすく語る「言葉」です。なぜ歴史が大事かというと、普通の人にわかりやすく、そこが入り口になるからです。全員がそうなる必要はないと思いますが、そういう人たちが土木の中にいるということが大切です。そして、土木史や土木論、土木と何かといった言葉の分野をもっと充実させていただくとうれしいと思います。

——本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。